

ようこそ

読書の森へ

2012PDF 版(2012年8月27日更新)

発行：東洋英和女学院大学図書館

Email: libweb@toyoeiwa.ac.jp

これまで紙面で発行してきた「読書の森へ」は2012年度よりPDF版に移行することに致しました。オススメ本情報が寄せられ次第、アップしていきます。チェックしてみてください。

[表示画像をクリックして頂くと、BookWeb 商品詳細（あらすじ、目次など）をご覧頂けます。](#)

【2012年8月27日掲載分】

前回に続き「図書館オリエンテーション in フレッシュマンセミナー」で、提出されたブックレポート課題の中から、優れた推薦文をご本人の許可のもと掲載させていただきます。



『「英語公用語」は何か問題か』
鳥飼玖美子著
(角川書店, 2010.11)

企業でも学校でもメディアでも、英語が話せることの重要性ばかりが取り上げられているが、本当に大事なこと、必要な事とは何かということを知ってほしい一冊です。英語が話せたからといって単にコミュニケーションがとれるわけではなく、外国語の習得は簡単ではない。日本人にとっての本当のコミュニケーション、そして国際共通語としての英語のあり方を改めて考えさせてくれ、現実を教えてくれる一冊です。

(国際コミュニケーション学科1年 山岸友里恵さん)



『神道見えないものの力』
葉室頼昭著 (春秋社, 1999.11)

この本には神道という視点から様々なことが書かれています。言葉の本来の意味やいのちを伝えるとはどういうことか、結婚について、女性の本当の美しさなどということも書かれています。現在は男女平等社会と言われていますが、神道では全て母である女性が基盤となります。授業で女性学を学ぶことも良いかもしれませんが、少し別の視点から女性の役割について知ることにも良いと思うので、私はこの本をみなさんにおすすめします。

(国際社会学科1年 最勝寺萌さん)



『10代にしておきたい17のこと』
本田健著 (大和書房, 2010.12)

選んだときは、きれいごとばかりかなと思いましたが、実際に読んでみるとそんなことはなく、文章も著者に直接話を聞いているような言葉遣いで、普段、読書をしない私でも、面白くてすらすら読めました。

私はこの本を読んで、海外旅行に行ってみたくなりました。みなさんも、この本を読めば、何か1つは10代のうちにしておきたい、したいことが見つかると思います。

(国際社会学科1年 H.Iさん)



『手紙』 東野圭吾著
(文芸春秋, 2006.10)

この「手紙」を読むと、家族の繋がりの深さを改めて学ぶことができると思います。自分が犯した罪は自分だけでなく家族も償うことになり、犯罪者の家族という運命からは一生逃れることができません。また、周りから犯罪者の家族として差別される主人公・直貴を見ると他人事ではないなと思わされます。差別があってはいけないが、自己防衛のために害のある人を避けるのは、人間として仕方ないことなのではないか、考える機会になると思います。

(保育子ども学科1年 中村美貴さん)



『秘密』 東野圭吾著
(文芸春秋, 2001.5)

私はこの本を読んで題名に“秘密”とつけた東野圭吾さんの考えに本当に驚きました。最初読んでいるうちは“秘密”という題名の意味は、娘の体に宿ってしまった妻が娘として生活することだと思っていました。しかし、読み進めていくうちに違うことに気づき、さらにラストのところでどんでん返しをされてしまいました。最後まで一気に読んでしまいたくなる作品です。

あなたも題名の“秘密”の本当の意味を知りたくありませんか？

(保育子ども学科1年 小泉佐和子さん)



『約束』 石田衣良著
(角川書店, 2004.7)

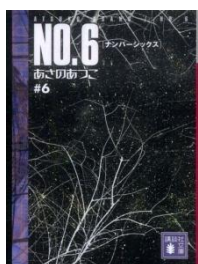
この本は、池田小学校事件のニュースに心を痛めた作者が生き残った子どもたちにエールを送り、亡くなった子どもたちを悼むために書かれた。その思いがより強く反映されているのが「約束」である。自分のせいで友達を亡くして苦しむ少年とその友達のストーリー。題材の内容は非常に重いですが、読めば心が温まる一冊となっている。思春期の子どもたちの悩みが自分自身、心当たりがあったりして共感しながら読むことができる。

(人間科学科1年 本橋ちなみさん)

※ タイトルの五十音順に掲載しました。

【2012年6月20日掲載分】

「図書館オリエンテーション in フレッシュマンセミナー」で、提出されたブックレポート課題の中から、優れていた4名の方の推薦文を、ご本人の許可のもと掲載させていただきます。



『NO.6 #6』あさのあつこ著
(講談社, 2011.6)

この本は、理想都市だと教えられ何の疑問も持たずにNO.6で生まれ育った主人公紫苑と、理想都市建造のせいで犠牲になった少年ネズミが、それぞれ違う思いを持ちながらもお互い協力し合い、本物の自由を得るために奮闘するお話です。

10代にして残酷な事実を受け入れる覚悟を持ち、戦おうとする彼らを見て、考えさせられることも多々あります。内容はもちろんですが、キャラクターも魅力的なので是非読んでみて下さい。

(国際コミュニケーション学科1年 M.O.さん)



『博士の愛した数式』小川洋子著
(新潮社, 2003.8)

この本の中で、私がオススメしたいポイントは3つあります。1つ目は、キャラクターの温かさです。人と人とのつながりが博士を中心にとっても優しいものになっています。2つ目は、数字や数式の持つ力です。この本は細かい数字の本ではありませんが、読んでいく内に必ずその美しさに引き込まれると思います。3つ目は、愛についてです。『博士の愛した数式』で表される切なくも優しい愛について、是非感じて頂けたら幸いです。

(人間科学科1年 大豆生田茉莉花さん)



『ひな菊の人生』吉本ばなな著
(ロッキング・オン, 2000.11)

私は吉本ばななさんの本が好きです。吉本ばななさんの本は、誰も気づかないような小さな日々の変化等をやさしく描くのが特徴的です。

『ひな菊の人生』も、主人公の直面する悲しい現実の中にも前向きに生きていくような心温まる描写がされており、とても感動的です。

奈良美智さんのイラストとのコラボがされており、視覚的にも楽しめます。是非皆さんもこちらの本、そして吉本ばななさんの様々な本を読んでみてください。

(国際コミュニケーション学科1年 鄭梨愛さん)



『ビルマの豎琴』竹山道雄著
(新潮社, 1955.12)

これまでも、ことあるごとに戦争に関する話を読んできたが、こんなにも「死」や「生」について考えさせられたのは初めてだった。至る箇所に心に響く言葉があったのだが、特に「われらはこれまであまりに無思慮だった。あまりに生きているということについての深い反省を忘れていた。」という部分は、平和が当たり前だと思ってしまうがちな現代にも通じるものがあると思った。

(人間科学科1年 押田愛さん)